

海外の主要国の大学での教育状況と比べると、日本は理系の学生が圧倒的に少ないようだ。こうした状況が日本の国力を弱める結果にもなっている。社会の大きな変化の中で、理系の知識を持っている人へのニーズが増えているのに、それに対応する人材が足りないのだ。

理系人材というと大学で理学部や工学部に進む人だけに限定されて考えられることが多いが、これは正しくない。経済学などが分かりやすい例だが、データ分析に象徴されるように理系の素養がないと先端の知識を吸収することは難しい。重要性を増している環境問題でも理系の知識は必須だ。

そもそも文系と理系を分けることにも問題がある。文理の両方の素養を持つ人が増えることがこれからの社会にとって必要だ。ただ、理数系

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

論壇

の能力は大学に入る前に学ぶ必要が高い。ピアノの演奏を学ぶことに似た面がある。大人になってピアノを始めると限界があるように、大学に入ってから理数系をゼロから学ぶことは難しい。初等教育から高校ぐらいの間に理数系を学ぶ機会を増やす必要がある。

大学での文理融合の重要性を述べ

たが、高校までに文系を中心に学び、大学になって理系を学ぶという順序は技術的に難しい。逆に高校までに理系をある程度学んだ人が大学になって文系の科目を学ぶ機会があること、視野が広がる。私が教えてきた経済学の分野でも、理系の素養がある学生が圧倒的に有利であった。大学だけでなく、社会人になっても

理系の能力を持っている人の有利さは変わらない。個人の職業人生にとっても、日本社会全体にとっても、高校までの理系教育を強化することが重要であるのだ。

ただ、ここで一つ注目すべき事実がある。小中学校の成績の国際比較のデータを見ると、日本の理数系の科目の成果は海外よりも概して優れ

理数系能力鍛錬の重要性

ている、ということだ。海外よりも優れているのに、高校生ぐらいまでに理数系に苦手意識を持つ学生が多く、大学になると理数系の科目を取る学生が極端に少なくなる。この傾向は女子学生に特に多い。本当は理数系の能力があるのに、自分は向いていないと文系の世界にこもってしまう人も少なくない。

大学入試の制度にも問題がある。多くの私立大学の文系では数学が試験科目に入っていない。だから、試験に通るため、あえて早い段階から理数系の科目を断念する人が多い。

また、女性は理数系に向いていないという誤った社会通念が根強く残っていることにも理数系離れ、とりわけいわゆるリケジョ(理系女子)の少なさの原因がある。

理数系の能力を鍛えれば、若者の将来により多くのチャンスが与えられる。そうした時代になっていることをもっと広く社会全体に伝えていく必要がある。中学校までそれなりの成果が上がっているのに、心理的なバリアーや入試制度でそうした機会を多くの若者が失っている現状は変えなくてはいけない。日本の未来にとってもそうした改革を進めていくことがぜひとも必要である。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。